



# ナツの 新聞物語

野尻湖の春

山崎 千明

お願い この本を読んだ感想をお寄せください s-2012090582752@zd.wakweak.com

## ナツの新聞物語

### 野尻湖の春

この話はノンフィクションではありませんが、ナツの新聞やここに登場する喫茶店は本当にあるのです。そして2人の女の子が遊びで作っている小さな新聞が元で、とても素敵な話に発展していきます。

ナツのじいちゃんの畑はナツの住むアパートの前にあって、その畑の道に面している所に新聞ポストが、ぽつんと立っています。じいちゃんが二人に頼まれて、手作りでポストのような新聞入れを作って、立ててくれたのです。

ナツは小学校6年になる髪の長い普通の女の子で、友達のアキちゃんと二人で小さなかわいい新聞を発行しているのです。月に1回ぐらい、不定期に作っています。季節のことや、近所のことや、二人が思いついたまま書きます。そして、出来上がると、じいちゃんのところを持っていきます。じいちゃんも、二人が新聞を持ってくると全部読み、間違った文章や、使ってはいけない言葉があれば、二人に直すように伝えます。二人は、それを素直に直し、じいちゃんから100円もらってコンビニに行ってコピーをしてA3の新聞を10枚作ります。そして、その白黒の新聞に、色鉛筆で色を塗ってまるでカラーコピーのような新聞を完成

させるのです。出来た新聞は、じいちゃんが作ってくれた新聞ポストに入れておきます。その新聞ポストには、箱が二つ付いていて、片方は新聞入れ、もう片方は、アンケート用紙が入っています。アンケート用紙の下にはアンケート受けのスペースもちゃんとついています。二人は、自分たちが作った新聞を見てくれた人が何か、返事をくれないかと、楽しみに待っていますが、もう1年以上前から発行しているのに、



まだ1通もアンケートが入っていませんでした。ところが、ある日とうとう、待っていたアンケートが入っていたのです。じいちゃんがいつものように野菜の種を蒔きに畑に来たとき、通り過ぎようとした新聞ポス

トのアンケート受けに何かが入っているのに気が付きました。のぞいてみると、どうやらアンケートの様です。じいちゃんはとても喜び、取り出しました。

「やれやれ、ナツの新聞のアンケートが、やっと帰ってきたか」

そんなことをつぶやきながら、二つに折り曲げてあるアンケート用紙を開いてみると、そこには（がんばってね）とだけ書いてあったのです。

「うん、簡単なアンケートだけど、きっと二人が喜ぶだろう」

じいちゃんが畑仕事を終えて家に帰ると、ちょうどナツが遊びに来ていました。

「ナツ いいものをあげよう！」

そう言ってじいちゃんはアンケートをナツに渡しました。ナツはアンケートを受け取ってうれしそうに開きます。

「なーんだ、短いな、でもまーいいや」

そんなことを言いながら、顔はとてもうれしそうです。ナツは走ってアパートの方に帰っていきました。ナツの住むアパートの近くにアキも住んでいるのです。ナツはアキの家に行ってアンケートを見せ、良かったね良かったねと、二人でとても喜びました。

「アキちゃん、今度は何を書こうか」

「うーん、そろそろお花見だし、桜のことを調べて新聞を作ろうか？ ナツちゃんは どう思う？」

「うん、いいね、そうしよう」

次の日、二人はいつものように学校が終わるとじいちゃんの経営する喫茶店に来ました。じいちゃんの喫茶店はとても変わっていて、全部じいちゃんが手作りで作ったのです。飾ってある人形や、蔵の模型、そしてわら細工の動物たちも全部じいちゃんが作ったのです。喫茶店なのに手打ちそばもやっているのです、薪ストーブにはいつも、そばを茹でるための湯の入った鍋が乗っています。春先でまだちょっと寒いせいか、薪ストーブが温かく、二人は「あったけー」などと言いながらいつものテーブルに付き、鉛筆や消しゴムを広げます。ナツとアキはとてもこの喫茶店が好きなのです。夕方はあまりお客さんがいないので、新聞を作るときはいつもじいちゃんの喫茶店で作るのです。

「ナツちゃん、ちゃんと調べてきた？」

「調べてきたわよ！アキちゃんこそ調べてみたの？」

二人で別々に桜のことを調べて、それを元に新聞を作ろうとしています。

「桜っていっぱい種類があるんだね！」

「そうね、お父さんにインターネットで検索してもらったんだけど、いっぱいあったからどうしようか？」

「うーんこれとこれでいこうか」

「そうね、そこはわたしと同じだから、それでいいわ」

じいちゃんはそのような会話を聞きながら、洗い物をしたり、そば打ち場の片づけなどを行っています。しばらくして新聞が出来ると、いつものようにじいちゃんの所に持ってきます。「みて」ナツがじいちゃんに新聞を渡します。「はいよ！」じいちゃんは新聞を見ながら、

「ナツ、ソメイヨシノってのはどんな桜かしっているのか」

「あの、辰巳池の公園にあるやつでしょ」

「そうそう、学校にあるのもそうだ、この辺にあるのはほとんどソメイヨシノだ」

じいちゃんは全部見てからナツに新聞を返し、100円あげました。「じいちゃん、直しは無いの？」

「今日のはOKだ、珍しく上手く出来てる」

「良かったー！」

二人はいつものように走って近くのコンビニに行ってコピーをしてまた喫茶店に帰ってきました。そして

「ナツちゃん、ここはピンクでいいよね」

「そうね、桜の話だから、ピンク主体でいこうか」

二人は30分ぐらいかかって、色鉛筆で色を塗って新聞を作り終わりました。

「じゃね」「ありがとうございました」

ナツとアキは終わると新聞を抱えて、さっさと帰って行きます。そして新聞ポストに新聞を入れるのです。

「ナツちゃん、また、アンケートがあるといいね」

「うん、明日、きてみようよ」「うん、じゃあ 明日ね」

次の日、学校が終わったナツとアキは揃って新聞ポストにやってきました。10枚有った新聞は5枚に減っていて、アンケートがまた入っていたのです。二人は顔を見合わせ、「やったあー」と叫びながら、ナツがアンケートを取り出し、二人で見ました。

(いつも楽しい新聞をありがとうね)

「この前のアンケートと同じ人かなー」アキが言いました。

「そうだね、字の感じが同じだね、だれだろうね」

それからは、二人が新聞を発行する度にいつもアンケートが1枚入っていたのです。

(今回のあの記事は、面白かったよ)

(あの意見には私も賛成よ)

(新聞に書いてあったところに行ってみたいね) などなどです。

小学校は夏休みになりました。昨日発行した新聞のアンケートが入っていないかナツが見に来ましたが何も入っていません。仕方なくアキの家に行って

「アキちゃんいませんか？」

と声をかけると、お母さんが出てきました。

「ナツちゃんおはよう。あら、ナツちゃんの所へ行くって言ってさっき出て行ったわよ」

「おばちゃんありがとう」

そう言ってナツは、きっとどこかですれ違ったんだと思いながら、新聞ポストの方に引き返します。そしてポストの所にいるアキを見つけました。でも一人ではなく、知らない女の人と一緒に、なにか話しているようです。「アキちゃん！」ナツが声をかけると、アキはナツに気が付き、「ほら！」とアンケートを持った手をこちらに向けたのです。

「あなたが、ナツちゃんね、こんにちは」

知らない女の人がナツに向かって笑顔で挨拶をしたので

「こんにちは」ナツも挨拶を返します。

「ナツちゃん、この人が、アンケートを入れてくれたのよ、アキが来たら、ちょうどこの人がアンケートを入れるところだったの」と、アキが言いました。

「私ね、ほら、あそこの宅老所で働いているのよ、冬子って言います、よろしくね」

冬子は40歳ぐらいだろうか、前掛けをして、はきはきとした優しそうなおばさんである。

ナツは女の人が指差した方を見た。そこは新聞ポストから50メートルぐらいしか離れていない所で、宅老所さくらの木と書かれた看板のある1軒の家だった。勿論、ナツもこの看板は何度も見たことがある。冬子は続けた

「この辺をいつも、お年寄りの方と散歩をするのよ、でも少し前まではコースが違っていたのでこの新聞には気が付かなかったの。この道の散歩コースに変えたら、新聞みたいなものがあるでしょ、見てみたらやっぱり新聞だった。でね、おばあちゃんたちに見せたら、面白そうだから1枚、頂きましょう、と言うので持って帰ってみんなで見たと。それから、この道を通るときは必ず新聞が入っているか覗いてみて、あったら必ず1枚頂いて帰るようになったのよ。おかげさまで、おばあちゃんたちにとってはとても楽しみなお散歩になったわけ。新聞があると、とても喜んで、ホームに帰ってからみんなで見ると。特に春ばーちゃんが気に入って、アンケートを書くのよ。そして私にポストに入れてきてくれないかって頼むのよ。明日の散歩の時でもいいんじゃないのって言うと、そ

れじゃあ明日の散歩のときにアンケートを回収してあるかどうか分からないからって。ナツちゃんとアキちゃんに会ったことを春ば一ちゃんに伝えておくわ、じゃあね、お二人さん、さようなら」

冬子は楽しそうにそう言いながら、帰る方向に歩きだし、こちらを振り返って

「また、楽しい新聞をみせてね」

と二人に言い残して宅老所に帰って行った。ナツもアキもとてもうれしかった。

そんなことがあってから、数日が過ぎたころ、ナツは用事があって宅老所の前を通りかかった。宅老所では何人かのお年寄りが庭で日向ぼっこを楽しんでいる。この前、冬子と名乗った女の人がナツに気が付き、声をかけてきた「ナツちゃん、こんにちは」ナツも「この前はどうも」と返す。

「ナツちゃん、このおばあちゃんが春ばあちゃんよ、いつもアンケートを書いている人よ」

冬子が指差した老女は車椅子に乗っていて、周りのお年寄りの中では一番年上に見えた。

ナツは返事に困ったが、[ありがとうございます]と月並みな返事をした。すると今度は春ば一ちゃんが

「いいや、こちらこそありがとう。いつも楽しませてもらっているのよ」  
声は年寄らしく少ししゃがれていたが、優しい声だった。

「お嬢ちゃん、これからどこに行くの？」

ナツははずかしそうに、もじもじしながら、

「じいちゃんの喫茶店」

春ば一ちゃんほうんほうんとうなずきながら、

「あの、おそばもやっている喫茶店？」

「そうです」

「そうかい、一度食べてみたいねー、あたしゃそばが大好きなんだよ。  
でももう歩けないから駄目だねー」

春ば一ちゃんは乗っている車椅子を手でポンとたたいて残念そうにつぶやいた。

「じゃ、これで」ナツは少してれながら、そう言って頭を下げ、歩き出した。

「お嬢ちゃん、また、新聞を見せてもらうからねー、ありがとねー、さようならねー」春ば一ちゃんが手を振りながら、ナツに言ったので、ナツも「さよーなら」と答えてから、走ってじいちゃんの喫茶店に向かった。ナツは顔がほてるのを感じながら、なぜか、少し大人になったみたいな気がしてうれしかった。知らないお年寄りの人と初めてあんなに沢

山しゃべった事がナツを少し興奮させたようだ。ナツは喫茶店に付くと母親から預かった袋をじいちゃんに渡しながら、

「じいちゃん、さっきねー、おばあちゃんとお話をしたのよ」

「どこのおばあちゃんだね」

「あそこの、ほら、さくらの木って書いてあるおうちの人よ」

「ふーん、ナツはおばあちゃんの友達を持っているのかね？」

「ううん、通りかかっただけ、でも話しかけられたの」

「ほう、それで？」ナツはさっきの出来事をじいちゃんに全部話しました。じいちゃんはにこにここと、うなづきながら、

「そうか、ナツ、新聞やってて良かったな！そうか、春ばーちゃんはそばが大好きなのか、そうか、そうか、うん、なら、食べさせてあげたいねえ！」

「え、だって車椅子よ」

「ああ、大丈夫だ、前にも車椅子の人がここに来たことがあるんだ、あの時はなんとかホームが出来たので、そのホームで発行する新聞みたいなのに、この店を紹介する記事を書きたいなんて言ってきたから、じいちゃんがOKすると、じゃあ、写真を撮らせてくれと言って車椅子の人が、この店に入ってきて、一緒に写真を撮ったことがある。えーとほら、これがそうだ」

「ふーん、車いすが入れるんだ！」

「うん、入るのは入れるんだ。だが、テーブルに着くのは難しいかな？  
いや、ここの椅子をとれば、ここに車いすが入るな、うん、これで良いんじゃないかなー」

「そうだね、それなら、車いすで入って、食べられるね」

「うん、ナツの新聞の大ファンなんだから、もし、来てくれるんだったら、じいちゃんは喜んで日本一のそばを打ってあげるよ」

ナツはじいちゃんと話したことを忘れた訳ではないのですが、小学校6年です。アキちゃんとも話しましたが、なかなか、きっかけがないと、宅老所に行って「そば、食べませんか」とは言えず、次第に時は流れていったのです。夏は過ぎ、秋風は吹き去り、やがて雪が舞って、もうすぐクリスマスのメロディーが聞こえてくる頃になりました。

相変わらず、ナツとアキは新聞を続けています。そして相変わらず、そのたびにアンケートが返ってきていましたが、この前、クリスマスのことを書いた新聞のアンケートが3日も経つのにまだ、帰ってきていません。「どうしたのかしら？」ナツもアキもちょっと心配になりました。

「おばあちゃんに何かあったのかしら？」

ナツはアキに言いました。

「行ってみる？」アキも心配なのです。

「もう一日だけ待ってみようか？」

小さな新聞と、それを見てくれるおばあちゃんのアンケートだけの付き合いなのですが、二人にとっては、ちょっとだけですが、大人の人とのとても楽しいお付き合いなのです。でも、二人の心の中には、じいちゃんが言っていた（おばあちゃんにそばを食べさせてあげたい）という言葉も、気になっていたのです。二人は1日待ちました。でもやっぱり、アンケートは入っていませんでした。

「アキちゃん、どうしようか？」

「なにかあったのかなー、行ってみようか？」

「そうだ、じいちゃんが言っていた、そばどうですかって、食べに来ませんかって、言ってみようか？」

二人は決心してさくらの木の家に来ました。もう寒いので日向ぼっこは誰もしていません。ナツが呼び鈴を押しました。家の中から、ピンポンと小さな音が聞こえてきます。「はい」聞き覚えのある声でしたので二人はほっとして、「ナツです」と答えると、あの時の冬子がドアを開けた。

「ああ、ごめんごめん、アンケートね、忘れていたのよ、ちょっと待ってて」

ナツとアキは何も言わないのに冬子は家の中に戻って行った。しばらくして、アンケートを手に帰ってきた冬子は

「ごめんね、春ば一ちゃんから頼まれていたんだけど、忘れていました。ごめんなさい」

にこやかにそう言ってアンケートを渡してくれた。ナツはすこし慌てて、

「あの一、それもそうなんだけど、この前に春ば一ちゃんが、おそばを食べたいって言ってたでしょ？」

「あ、そうね、なんだか大好きなんだって、何でもね、春ばあちゃんのお母さんが打ったそばの味が、忘れられないんだって」

「じゃあ、ナツのじいちゃんと同じです。信濃町という所に畑があって、そばも作っているんです」

「そうなの、それは美味しそうね」

「ええ、ナツにはそばの味は良く分からないけど、とっても美味しいのよ、」

「へー、私も今度食べに行ってみようかなー」

「春ば一ちゃんと来て下さい。じいちゃんに話したら、じいちゃんも食べてもらいたいって言ってました」

「あら、ありがとう。でも春ば一ちゃんはちょっと無理かもね」

「大丈夫です。じいちゃんが、言ってたんだけど、車いすの人もあの店に入れるし、テーブルもなんとかなるって」

「そう、春ば一ちゃん喜ぶわー、じゃあ、今度聞いておくね、たまたま今日は春ば一ちゃん、お休みなよ。そうだ、連絡はあのアンケートボックスでいいかしら、あのボックスに春ば一ちゃんに、聞いたことを書いて入れて置くわ、ところでお店のお休みはいつなの？」

「おそばは火水目金とやっています。土曜日はじいちゃんが畑に言っちゃうから、そばはありません」

「そうなの、火水木金ね、うん分かったわ、じゃあ、明日の昼には入れて置くわ、それでいい？」

「あ、はい、毎日見てますから」

二人はお辞儀をして外に出た。寒いと思ったらいつの間にか雪がちらつき始めている。明日は24日クリスマスイブだ。

「ナツちゃん、じいちゃんに言っといてね」

「返事が来てからでいいじゃん？」

「だって、今日行くって書いてあったら、どうすんのよ」

「それは無いよ、それは無いと思うけど、そうだ、ちょうど良かった、今日じいちゃんに合うんだ、クリスマスには1日早いけど、パパが明日

遅くなるからって今日、じいちゃんちでクリスマスやるんだ。その時、言っとくよ」

「じゃあ、また明日ね」「バイバーイ」

その夜、ナツの家族は全員で喫茶店のあるじいちゃんの家に出かけた。盆や正月や、だれかの誕生日には必ずじいちゃんの家でご馳走を食べるのが恒例に成っている。

「ナツ、今度もアンケートは入っていたか？」

じいちゃんがナツの顔を見ると話しかけてきた。

「それがね、話せば長ーいお話なんだけど、実はね、アンケートが入ってなかったのよ、でもね、忘れたんだって、そして、そばが食べたいかどうか、明日返事が来るの」

じいちゃんは吹き出した。

「はっはっは、お前が何を言っているのかさっぱりわからん。ちゃんと言え、ちゃんと、5ダブル1エッチだ、なにがどうしてどうなったんだ」

「だからね・・・」ナツは今日、さくらの木で冬子と話したことをもう一度話した。今度はじいちゃんも分かったようである。

「そうか、良かったな、じいちゃんも楽しみが増えた。信濃町の人だったんだ。そうか、じゃあ、おばあちゃんが来たら、腕によりをかけて作るとするか」

そんな会話を聞いていたナツの父親がビールを片手に持ってじいちゃんの隣に座った。

「ナツはまだ、新聞作っているのか、そうか、えらい！！」

「やだー、パパ知らなかったの？もう、この前ので15号よ」

じいちゃんもぐい飲み片手に上機嫌である。

「うん、ナツはえらい！最近手直しが無くなってきた。でもなー、ちょっと、楽しんでねーか、この前のクリスマス号、あれはちょっと手抜きだぞ」

「あー、あれね、アキちゃんが忙しかったのよ、塾でね だから、まー良いかって」

「まー、良いか、無理すると続かねーからなー、よし、いい返事が来ると良いなー」

じいちゃんはうれしそうに皆を見た。孫は全部で5人いて、娘二人を含め、全員ここに揃っている。じいちゃんの妻のばあちゃん、ナツのパパと長女のパパ、兄ちゃんと、妹、そして下の娘の連れ合いと3人の子供たち、大変にぎやかである。じいちゃんたちは男3人で酒を飲み交わし、子供たちはうるさく、はしゃぎ回っている。特に小さな二人はじいちゃんにからむのが好きで、肩に乗ったり、あぐらの中に座ったりして遊んでいる。両女親は、あれしちやダメ！これしちやダメ！それはいけない

って言ったでしょ・・・などと子供たちを叱りながら、ご馳走を食べ、ジュースやビールを飲む。いつもの光景である。クリスマスツリーも当然飾ってあり、チカチカとLEDが灯るなかでお決まりのプレゼントが配られる。

子供たちは父親や母親からのプレゼントに夢中になって、遊び始め、やがてあっちの方が良いとか、こんなのつままない、などと不満を漏らしたりする。そんな子供たちに向かってナツのママが、

「あんたたちねー、分かった？いい子にしていないと今夜サンタさん来ないからね！わかったの！！」

するとナツはすかさず、

「ママー、今夜はサンタさんこないの！クリスマスは今日じゃなくて明日でしょ、まったくー」

子供たちのさらにハシャイだ声が飛び交い、シャンパンが開けられケーキが出てきた。ばあちゃんはそのケーキを小さく切り始める。

「じいちゃんのは一番小さいので良いぞー」それを聞いたばあちゃんは、いつものように

「分ってるよ、これでいいでしょ」そう言って一番小さく切ったケーキを皿にのせて、ナツに渡し、じいちゃんに届けるように手で指図する。

じいちゃんは2人と酒を交わしながら（じいちゃん、幸せですね）この前のナツの兄ちゃんの誕生日の、今日と同じような家族パーティーの席で隣にいる娘婿から言われた言葉をぼんやりと思い出しながら、小さなケーキを美味しそうに食べ、いつものように酔いつぶれ、いつものようにばあちゃんに起こされ、二人だけになった部屋で寝巻に着替えて床に就くのである。

翌日、学校が終わってから、ナツとアキは伴って新聞ポストに行った。

「アキちゃん、あるよー」「本とだ、春ばーちゃんが返事をくれたんだ！！」二人は急いで取り出し、ナツが声を出して読んだ。

「この前はありがとうね、留守しててごめんね、お言葉に甘えておそばを頂きたいと思っています。明日、2時ごろ、3人でお店に行きますので、よろしくね」

「じいちゃんに言わなきゃー」「今から行く？」「行こうか」二人は歩いたり走ったりしながら、じいちゃんのお店に行って手紙を見せたのです。

「よーし分かった。腕によりをかけてご馳走してあげよう、ちょっと待て、3人来るんだな、春ばーちゃんていう人は確か車いすだったよなー、すると、もう一人はきっと、お前らが言っていた冬子っていう介護の人

だろう？でも、もう一人は誰だろう？・・・うーん、もし、車いすの人だったら、もう一つ、テーブルを用意しなくちゃいけねーな」

「じいちゃんそれは無いよ、だって私たち時々、あの人たちがお散歩をしている所を見たことがあるけど、車いすの人はいつも誰かに押しってもらっているよ。ねー、アキちゃん」

「うん、私もそう思う、半分ぐらいの人たちは歩けるよ」

「そうだな、うん、そうだな、ナツもアキちゃんも頭いいーな」

「じいちゃんが悪いのよ」

「そうか、そうだな、こりゃ参った参った、はっはっは」

次の日の昼は喫茶店もあまり忙しくなく、そばのお客さんが4人来ただけでした。もともとあまり忙しいお店ではないのです。お客さんが来て、そばを注文してからじいちゃんがそばを打つので、他の店より、どうしても時間がかかってしまうものですから、忙しいサラリーマンはあまり来ません。普通のそば屋さんは午前中にその日に見込まれる分のそばを打って用意しておきます。でもじいちゃんはこだわっているのです。(そばは打ちたての方が絶対に美味しい、残っても勿体ない!) 喫茶店でもあるのですが、なぜか、あまりお客さんが来ません。

2時を少し回ったころ、「こんにちは」と言って女の人が入ってきました。

「いらっしやーい」

「さくらの木の者ですが本当によろしいのでしょうか」

ナツに聞いていた冬子と思われる女性である。

「えー、いーですとも、お待ちしていました」そう言ってじいちゃんは携帯電話でばあちゃんを呼んだ。ばあちゃんは忙しい時だけ、店を手伝っていて、普段は店の隣にある母屋にいるのだ。冬子はいったん店を出て、春ば一ちゃんと思われる人の車いすを押して入ってきた。続いてもう一人の男のお年寄りも「すみませんねー」と言いながら中に入った。店の中はお昼のお客さんが帰った後で他には誰もいなかったのです。そこにじいちゃんから連絡を受けたばあちゃんも来ました。

「あー、いらっしゃいませ、さくらの木の方々ですね、良くいらっしゃいました」。

じいちゃんはにこにことして、

「あなたが春ば一ちゃんですね、ナツから聞いてます。そしてあなたが冬子さん？」

「はい、そうです。無理言ってすみません。こちらはホームで一緒の梅じいちゃんです。梅じいちゃんもおそばが大好きだということでご一緒させていただきました」

「おせわんになります。10割そばと聞いたんで、ぜひ連れてってくれとたのんだんですわ」

「良くいらっしやいました、じゃあ、春ばあちゃん、ちょっと待ってて下さい」

じいちゃんは店の6人掛けのテーブルの椅子の一つを端に寄せながら

「ああ、冬子さんとおじいちゃんはこちらに先に入って下さい」そう二人に言って、櫓の厚い輪切りを三枚並べて作った自慢のテーブルに案内した。二人は、言われた通り、入り口の反対側に並んで腰かけた。

そしてじいちゃんは春バーちゃんの車いすを押して、先ほど退かした椅子があった場所に付けて、ブレーキをかけた。そうすると、たまたま、おじいちゃんが奥に入っていたので春ばあちゃんは冬子とほぼ向かい合う形になる。

「これでいいですか」冬子に聞いた。

「ああ、すみませんね、お手数をおかけして、・・・春ばあちゃん、そこで良いでしょ？」

「えーえー、こんな立派なテーブルでこんな良いところにこさせてもらってうれしいよ、それにこの、ストーブ、あったかいねー」

「さて10割そばでいいですか？並と中と大がありますが」

冬子は二人の顔を見てから「並でお願いします」と言った。じいちゃんも中はちょっと大きいかな？と思っていたのでうなずきながら

「はい、並が3つですね、しばらくお待ちください」

そう言ってじいちゃんはそば打ち台の所に行った。ばあちゃんは三人のお客さんに、そば茶を出したり、そばつゆなどの用意をし始めている。春ばあちゃんからは、じいちゃんがそばを打ち始めたのが見えている。

「へー、こね鉢は小さいんだ」そんな春バーちゃんの声がじいちゃんに聞こえて来た。

「普通はこんなでっかいのを使ってこうやって手を回してやっているでしょう」じいちゃんはジェスチャーを交えながら、春ばあちゃんをみた。

「そうそう、水回しって言ったかねー」

「そう、水回しです。うちはこの小さいのでこのへラを使ってこうやってやってしまうんです」じいちゃんは得意げに答えながら、4人分のそばを10分足らずで伸ばし上げた。

「早いねー、私の母さんはだいぶ時間がかかっていたけどねー」

そんな声を耳にしながら、じいちゃんはそば切りにかかった。そば切りもじいちゃん独特の方法で、まるでキャベツの千切りの様にそばを切っていく。

「すごいよね、こんなの見たことないわ」冬子もびっくりして三人で蕎麦談義をしているようである。

じいちゃんは、切り終わったそばを厨房に運んでそばを茹で始め、ばあちゃんは様子を見計らって三人の所にそばつゆや、薬味を運んで行った。

「もうちょっと待ってね」そう言って厨房に帰って、しばらくして今度はゆであがったばかりのそばを二枚手に持ってきた。

「お待ちどう様でした」ばあちゃんが奥の二人にそばを出し、続いてじいちゃんが1枚持ってきて春ばあちゃんの所に置いた。

「お待たせしました」三人とも「いただきます」と言って食べ始めるたのであるが、春ばあちゃんの手が止まった。手が、少し震えている。

「春ばあ、どうしたの」冬子が声をかけた。

「うん、うん、かーさんの味だ、うん、美味しーねーうん」

春ばあちゃんは手で涙を拭きながら冬子に言った。

「かーさんね、時々そばを打ってくれたのよ、子供のころはあんまり美味いと思わなかったけどね、でもね、かーさんが死んでから、妙にあのそばが食べたくてね、いろいろ行ったんだよ、美味しいって言うおそば屋さんに、でもね、かーさんの味じゃあなかった。いろいろ行ったんだよ」

「春ばあ、よかったのー、こんな美味しいの食べられて、よかったのー」おじいちゃんも少し瞬きしながらそう言った。

「いやー、うれしいですねー、お客さんに美味しいって言って頂くのが一番うれしいんですよ」

しばらくして、ストーブに薪をくべに来たじいちゃんは、後ろ向きのまま「このそばは、信濃町で私が栽培しているんです。そう、霧下そばってやつですよ、春ばーちゃんも、信濃町の生まれなんですって？だから、きっと味が似ていたんですね」そう言って振り返った。

三人ともそばを食べ終わったようである。

「ご馳走様でした」春ばあちゃんはそう言って箸をおきながら、

「私んちはね、野尻湖の町の向こう側なのよ、湖の南側の向こうの集落なのね、昔からお米やそばを栽培している貧乏農家よ」

「あのねー春ばーちゃんはとってもロマンチストなのよ」冬子が割って入ってきた。「あのねー」

「やだー、冬ちゃんやめてよー」春ばーちゃんは笑いながら冬子に言ったが冬子は春ばーちゃん的笑顔を見ながら..、やめようとしな

い

「いいじゃないの、何度も何度も聞かされたんだから、話させてよー」

「そうじゃ、そうじゃ、わしも耳にタコが出来ておるわい、なんならわしが話そうか？はっはっは」おじいちゃんも笑っている。冬子は続けた

「あのね、」冬子はじいちゃんとはばあちゃんに向かって春ばあちゃ

んの話をはじめたのです。

「春ば一は、実家にいたころ、朝の散歩に良く湖の所まで行ったんだって。ちょっと高くなっている所でね、坂道を上り詰めると突然、木の間から山や湖が見える静かでとてもきれいな場所なの、そこでね、白馬の王子様に会ったんだよねー！」

春ばあちゃんは笑いながら、手を顔の前で左右に振り、照れ隠しをしている。

「あのね、いつものように散歩をしていたら、ウグイスの鳴き声が聞こえて来たのよ、まだ、鳴き方が上手くないなと思っていたら、ちょっと変なのね。どうもウグイスと、それを真似して人間が音をだしているようだったのね、まるでウグイスとお話をしているようなの。春ば一はびっくりして音の聞こえてくる方に歩いて行ったのよ。そしたら、車が止まっていたね、春ば一と同じぐらいの年の男の人が指を口に入れて（ホーホケキョ）ってやっていたのよ。声をかけたかったんだけど、そっと隠れて見ていたんだって。ウグイスが（ホーホケキョ）と鳴くと男の人が少し間をおいて（ホーホケキョ）って指の笛を吹くのよ。するとウグイスが（ホーホケキョ）って鳴いて、本当にウグイスとお話しをしているみたいだったのよ。とっても素敵な人で、その人に春ば一は一目ぼれれしちゃったのよ

ねー」

「やめてよ、あーはっは、あー恥ずかし」春ばーちゃんはかなり照れている

「その人とお話しさえしたことが無いのに、その人のことを何にも知らないのに、一度見ただけで好きになってしまったんだって」

今度は春ばーちゃんが続けた

「変でしょ、なんだか、白馬の王子様みたいに思えてね、勝手に思い込んだのねでもねー、かっこよかったわよー！」

「それからどうなったんです？」ばあちゃんが聞いた

「あの人ね、私に気が付かずに車で帰ってしまったのよ」すると冬子が春ばあちゃんを止めるそぶり

「でもね、続きがあるんだ、あのね、.それから1週間ぐらいしたら、また、いたのよ。ホーホケキョがね」それを聞いて春ばーちゃんが語りだした。

「そう、あの時はびっくりしたわ、でも本当はもう一度会えるかもしれないって願いながら、毎日散歩をしていたのよ。そうしたら本当にいたのよ、あの人ね、でね、この前のように隠れて見てたのよ、でも、この前とちょっと何か違ったのね、そう、鶯がないのよ、ウグイスがないのに一人で（ホーホケキョ）ってやっていた

のよ、そしたら笛をやめて、急にこちらを向いて、向こうから私に近づいてくるのよ、白馬の王子様が私に向かって歩いてきたのよ、もう、私は足が震え、心臓はバクバクよ」

「分かるわー、で見つかったんですか」ばあちゃんは興味津々で聞いてきた。

「あのね見つかったんじゃなくて、最初からばれていたんだよ、そしてね、こう言ったのよ、僕はあなたに会いに来ましたって、もう、私は気絶するかと思ったわよ」

こんな話をすらすらとしている春ばーちゃんの顔は少女のようにとっても明るく楽しそうである

「ロマンチックでしょ」冬子がにっこりして続けた

「そしてね、この前は失礼しました。あなたに気が付いていたのですが、恥ずかしくて逃げてしまいました。でも、あの日、ちらっと見えたあなたの横顔が、頭から離れなくて、また、ここに来たらあなたに会えるかもしれないと思って来ました」って

「まるでおとぎ話の世界でしょー！」

「それからどうなったの？」いつの間にか学校が終わって様子を見に来たナツが声を挟んだ。

「お、ナツいつ来たんだ」じいちゃんはびっくりして振り返った。

「さっきからいるわよ、ねー、春ばーちゃんそれからどうなったの」

「おはなしはね、これでお終い」すると冬子も

「私もね、ここから先は知らないのよ、ひ・み・つ・なんだって」

そう言って笑った。

春ばーちゃんはちょっとさみしそうに

「今頃どうしているかねー」とつぶやいた。

春ばーちゃんのその一言で今の話を聞いていた全員が一つのことを思った。

それは、たぶんあまり幸せな結果にはならなかったのだろうと。

しばらく黙っていたじいちゃんが口を開いた

「いやー、そばを食べてもらって、こんなにいい話が聞けて良かったですよ、なあ、ナツ」

「うん、でも、その先も気になるなー」

「ナツ、この先は大人の世界なんだよ、はっはっは」

「ははは、あー楽しかった。冬ちゃん、そろそろ行こうかね」

春ばあちゃんは自分で車いすを少し動かそうとした。

「春ばあ、ちょっと待って、お勘定しなくちゃ」

「ああ、ごめんごめん、この年で上がってしまったみたいだよ、あっはっは」

「また来て下さいね」

「ええ、また美味しいそばを頂きに来ますね。ご馳走様でした」

3人はとても満足そうに帰って行った。

しかし、その後春ばあちゃんたちは店には来ていない。

相変わらずナツとアキは新聞を発行していた。そして相変わらずアンケートは新聞を発行する度に1枚だけ入っているのである。

冬の間は寒いので、さくらの木の家のお年寄りたちのお散歩も中止されていたようで、ナツもアキも今までときどき見かけていた、老人たちが散歩をしている姿を見ていなかった。

春になってナツもアキも中学一年生になりました。

5月の連休前のことでした。冬子がそばを食べにやってきたのです。

「おや、今日はお一人？」

「ええ、ちょっとお話が有ってきました」

冬子はこの前と同じ、10割そばの並を注文し、美味しそうに食べ終わると、じいちゃんに、春ばあちゃんの話をはじめたのです。

春ばあちゃんはもうさくらの木の家にはいないこと、

新聞のアンケートは冬子が新聞を郵送して返事をもらっていたこと、

一度結婚をしたのだけれど、その人とは折りが合わず、2、3年で

分かれてしまったらしいこと、

だから子供もなく親戚と言えば実家を継いだ弟の家族だけである

こと、

早老症という大変珍しい病気だったらしく、80歳以上に見えた春ば一ちゃんだったが、実は20歳も若かったこと、

余命がいくらかもないことを悟ったのか、どうしても生まれた実家に帰りたと言っていたこと。

本名は中村由美子というが、春が大好きだったので春ば一ちゃんと呼んでいたこと、など。

そんな話を聞いたじいちゃんは何も言わずにうつむいていたが、

(ふー) とため息を一つ付いて、

「そうですか、わざわざありがとうございます」と、冬子に丁寧にお辞儀をした。冬子は少し、様子が変わったじいちゃんを見つめて、

「あの一、もしかして？」

「いや、違います」

「この前は、気が付かなかったのですが、そこにある笛は指笛楽器と書いてありますよね、これはあなたが作った笛ですよ、あなたには指笛が出来るんですよね？」

「ええ、まあ、こんなものを作っていますから」

「じゃあ、やっぱり？」

「いえ、違います。彼女もそんなに好きだった人なら、少しぐらい年を取っても、分かるでしょ」

「そうね、確かにそうね」冬子は不満げではあったが笑顔で

「ご馳走様でした。おいくらですか？」財布を出しながらそう言ったので、じいちゃんは少し慌てて

「いやー、結構です。わざわざ来ていただいたのですから、御代を頂くわけにはいきません」それでも冬子は代金を払おうとしたが、じいちゃんのかたくなに拒んだ。

「そうですか、では今日の所はご馳走にならせていただきます。この名刺、頂いてもいいですか？」そう言って冬子がレジの所に置いてある店の名刺を指差した。

「ああ、どうぞ、どうぞ」

その名刺には店の宣伝と共に今まで話題に上がらなかったじいちゃんの本名が印刷されていたのである。

「この名刺を春ばあーちゃんが見ることはもう無いわね」

そう、冬子がつぶやいて、「ご馳走様でした」と深々と頭を下げ、帰ろうとしたとき、じいちゃんはもう一度声をかけた。

「今度、何かの機会があって春ば一ちゃんと連絡が付いた時に、私も春ば一ちゃんが元気になるように祈っていますとお伝えください」

「わかりました。失礼します」冬子は帰って行った。

5月の連休最後の、暖かな日曜日でした。あそびに来たナツに向かってじいちゃんが話しかけます

「ナツ、ちょっとじいちゃんとドライブしないか？」

「えー、じいちゃんとデートするの？」

「そうだ、デートだ、デートしてナツに見せたいものがあるんだ」  
ちょっと嫌そうなそぶりをしたナツを見て、ば一ちゃんが応援してくれます

「ナツ、行っておいで、じいちゃんとデートしておいで、そして美味しいものでも食べさせてもらいなよ」

「うん、わかった、何食べようかなー、見せたいものって何だろうなー」

「ナツ、それはお楽しみだ、行けばわかる」

二人はじいちゃんの車でデートに出発したのです。そしてじいちゃんは車の中でナツに、この前冬子から聞いた、春ば一ちゃんの話をしたのです。春ば一ちゃんはあまり余命が無いこと、今は野尻湖の

近くの実家にいるらしいということ、早老病という珍しい病気の為にじいちゃんより年を取って見えるが実はじいちゃんと同じぐらいの年齢であったことなどです。ナツは「ふーん、ふーん」と言いながら、聞き流しています。

車は国道18号線を北に進み、信濃町に入りました。

「分かった、じいちゃんの畑に行くんでしょう？」

「どうかなー、着くまで秘密ですよー」

しかし、じいちゃんの車は、そばを作っている信濃町の畑を通り越した。そして18号線を右折して外れ、少し行ったところで今度は左折した。左折するところで看板を見たナツは

「あーわかったわ、野尻湖でしょう、その近くに春ばーちゃんが今いるっていう」

「そう、あたりー」

「春ばーちゃんに会うの？」

「いや、春ばーちゃんの家も知らないし、合うことはないよ」

車は小さな池のある集落を通り過ぎ坂道を登り始めた。その坂道を上り詰めたところで目の前が急に開けて、青空に真っ白な雪を頂いた妙高山や黒姫山が見え、下には透き通ったような野尻湖が立ち木の隙間から見えたのである。

「わー、きれい」ナツが思わず歓声を上げた。

「きれいだろ、ここが一番きれいなんだ」

車は右に曲がって少し広いところで止まった。じいちゃんは、車の中では我慢をしていた、たばこに火をつけて車から降り、ナツも降りた。

「この景色をナツに見せたかったんだ」じいちゃんは（ふー）とたばこの煙をふかしながら

「春ばーちゃんはきつとこの景色が好きだったんだろうな、この道を散歩するのが好きだったんだろうな、・・・ナツ、何か聞こえないか？」

「なーんにも聞こえないよ」

「いや、ウグイスの鳴き声がある、ほら！」ナツは耳を澄まそうと下を向いた。その時である。

（ホーホケキョ　ホーホケキョ）ナツのすぐ近くからウグイスの鳴き声があったのだ。

「えー、じいちゃん？」ナツは目を丸くしてじいちゃんを見た。じいちゃんは口から指を出して、その反対の手でナツの頭を撫でながら、ナツがすべてを悟ったことを感じていた。

「ナツ、ばーちゃんには内緒だぞ」

じいちゃんはナツにはそう言ったが、実は、ばーちゃんには冬子がそばを食べに来た日の夜に、すべて話してあったのだ。少し、照れ臭かったのである。

「ナツ、じいちゃんはな、ここで確かに春ばーちゃんと会ったんだ、白馬の王子様だったんだぞ、はっはっは、でもな、そんなにかっこよくはなかったんだ。実は鯉を釣りに来ていてな、ちっとも釣れないから帰ろうとしたらウグイオスが鳴いたんだ。だから、じいちゃんは指笛で（ホーホケキョ）とやって見たんだ。そしたらウグイスのやつ、返事をするみたいに鳴きかえしてきたんだ。面白くてな、夢中になってやっていたら、あの人が見えたのさ、ほら、そこにいたんだ。」

それはナツの立っているすぐそばの、大きな1本のミズナラの木でした。

「2回目に会った時、初めて話をしたんだ。いろいろ話したなー、そしてまた会いたいってじいちゃんが言うと、彼女は恥ずかしそうに、（1週間後のこの場所で、今の時間なら、）と言ったんだ。今と違って携帯なんか無いし、お互いに名前を名乗って1週間したらまた会おうと約束して別れたんだ。ところがだ、約束の日の朝早く、じいちゃんのおじいちゃんが亡くなったんだ。じいちゃんをととても

可愛がってくれたおじいちゃんだ、だから、とてもここには来られなかったのさ、仕方がなかったんだよ、葬式が済んでから何度も何度もここに来たのさ、でも会えなかった。でもな、お前の新聞のおかげでまた会うことが出来たんだ。ナツありがとな」そう言ってナツを見たじいちゃんの目には、あの日の由美子の姿がナツに重なって見えていた。

「春ばーちゃんは気が付かなかったのかなー」

「あの頃、じいちゃんは眼鏡もかけていないし、ひげもなかった。そして40年もたっているんだ、分からないよ」  
ナツにはそう言ったが、じいちゃんは思っていた。中村由美子が自分の住んでいる町にいたことが、偶然だったのかと。そしてあの時、最後になったあの時に自分の住んでいるこの町の話もしていたことを、また、車いすでそばを食べた由美子の目には、冬子の後ろの棚に飾ってある指笛楽器と書かれた文字が写っていたのではないだろうか。

じいちゃんは、中村由美子が亡くなったと聞いたのは、それから数日したころの、冬子からの1本の電話だった。冬子の話では、ウグイスの鳴き声が聞こえると言って、笑みを浮かべ、眠るように亡くなったそうである。

